

「信仰・希望・愛」の展開の物語

第八部 「信仰と愛」に結びついた希望（その1）

エルサレムがローマの軍勢に滅ぼされ、神の民としてのイスラエルの崩壊が決定的となる少し前、少数のユダヤ人がエルサレムで同国人に叫んでいました。「**あなた方が十字架につけて殺したナザレ人イエスを、神は復活させた**」。(使徒3；15・4；10・5；30)

はじめに、3人の先達が「**希望**」について書いておられることを読みましょう。

希望の効用

希望が人間実存に対して持っている意味は、酸素が肺に対して持っている意味に較べられる。酸素を取り去ってしまえば、人間には窒息死と云う事態が起こる。それと同じように人間から希望を取り去れば、人間は絶望と云う呼吸困難や、人生は空しく無意味だと云う気持ちから生じてくる、心的・精神的衰弱と云う、心のマヒ状態・或いは虚無の状態に陥る。酸素の供給が有機体としての人間の生命に是非必要である如く、希望の供給が人間の運命を決定する。(エミール・ブルンナー。「永遠」より)。

希望と不安

人間は時の中の存在です。その事は人間が不安の中の存在であることを意味します。不安とは、将来が不確実であって、自分がどうなるか分からないことから来る存在の根底の動揺感、或いは喪失感です。人間が時間の中の存在である限り、不安は免れません。その不安を克服するのが希望です。希望とは、確かな良い将来が現在の生の根底を支えることです。希望とは、未来が現在に突入している状態です。

時の中にいる人間にとって、最も確かな将来は死です。死の彼方にあるものが何であるか分からないので、死と云う将来は現在の生を根底から否定するものとなり、根源的な不安となります。この不安を克服する希望はあるのでしょうか。人間にとって基本的なこの問いに答えることが、今回の「希望」に関する考察の、第一の目的ですが、欲張りな人間にとってのその他もろもろの希望についても考えたいと思います。(市川喜一師・畑野一部)

「希望に向かって」(故小池俊男主教著、小池宣郎、義郎 両兄編集「み翼の陰に」より)

「信仰と愛と希望」の三つと云う。しかし、これは三つであって一つである。バラバラに並立する三つではない。それは「父と子と聖霊の関係」の如くである。

私たちの希望とは何か？それは「からだのよみがえり」の時、新天新地の成る日への希望

に生きることである。「からだのよみがえり」とは、息を失った人が再び起き上がって歩き出すと云ったような事ではなく、霊魂の不滅と云ったことでもなく、また死後その人の人格的感化が他の人々の心に残ると云ったような事でもない。

「からだのよみがえり」は、**ただイエス・キリストの約束によって信じ、その復活によって確信させられる事実である**。不思議にも聖霊の直接の説きあかしが、私たちの心にささやきかけて、そこに私たちの「アーメン」が許されることである。

イエス・キリストの復活は、人の言葉で語り得ない驚天動地の出来事だった。それをせめて書き表そうとしたのが新約聖書の記事だったのである。それは永遠の輝かしい神の子の姿がまぶしく見られた時であって、神の子の生涯が覆いを取って見せられたのである。

私たちはイエス・キリストに接合(ツ)がれたものである。葡萄の枝のようにその幹である御子に結び合わされ、その幹の生命は枝えだにも及んでいるのである。御子の復活、栄化(救いの完成)の姿に続く者とされたのが私たちである。この栄光と希望を思うべきである。これがクリスチャン・ホープであり、**キリスト者はこの望みに生きる者である**。

この望みの日は今の世で力を尽くして生きることの内に見られるものではない。今の世で生きる生き方とは、イエス・キリストに聞き従い(信仰)、自らを低くして他に仕えて行く事である(愛)。他に仕えることが生きる意義である。**自らを燃焼させて、他を生かしてゆくことが生涯の意義である**。それは一言で「愛」と云われることである。

かいこ(蚕)は繭を作ってやがて蛾になって行く。蚕は蛾になる日を知らないであろうし、なるとも思ってないだろう。蚕と蛾は姿もあり方も全く違ったもののように見える。

その様な譬が、人間の現世での生涯と後のよみがえりとに譬えられるかもしれない。今の私たちの肉なる人の姿が死の中を通して、後の日のよみがえりのからだを与えられるのはそのような事かも知れない。いまの時はただ、イエス・キリストを仰ぎ見て、彼により頼み、その後ろに従って十字架の道に行くのみである。

悲しみにもくじけず、苦しみにも立ち上がり、喜びの中にも安住せず、成功の時にも満足せず、どのような時にもキリストの悩みを自分のものとして力を尽くすのです。

私たちは、尊い者として神がこの世に生れさせられた一人ひとりである。この世の数十年の生涯が終わった時、無に消えてしまうべきものとして、存在させられているものではない。**輝かしい日が待っている。復活の希望である。「以上 故小池主教の言葉」**

「ピステイス・クリストウ」

所でパウロは、引用ではなく自分の言葉で「信仰」を語る時、「**ピステイス・クリストウ**」

と云う言葉をよく使いました。それは「キリストの信仰」又は「イエス・キリストの信仰」と云う表現です。そして「救われる」と云う表現よりも「**義とされる**」と云う表現を好んで用います。これは、神と人との関わりを義と云う用語で語る旧約聖書の世界に生きていたパウロにとっては自然な事だったのでしょう。それでパウロが福音を語る時には、「**キリストの信仰によって義とされる**」と云う表現になるのです。

所がこの「キリストの信仰」と云う表現は、このままの日本語では理解が難しいので、「キリストを信じる信仰」「キリストに対する信仰」(口語訳)とか、「キリストへの信仰」「キリストを信じること」(新共同訳)と訳されています。(ガラテヤ書 2 ; 16 と 20 3 ; 2、ローマ書 3 ; 22 など)、福音の確信を語る重要な個所に用いられているこれら訳語の原語はすべて「ピステイス・クリストウ」(キリストの信仰)です。勿論口語訳、新共同訳に用いられている訳語が間違っているわけではありません。しかし、これらの訳語は「ピステイス・クリストウ」が意味する一面しか捉えていないと思われるのです。これらの日本語訳では、キリストと云う、自分の外なる対象に向かう人間の態度と受け取られるでしょう。けれどもパウロが《キリストの信仰》と云う時には、それ以上の内容が含まれていると思われます。パウロは、《キリストが持つておられるピステイス》と理解して、この場合、ピステイスは信仰ではなく、真実とか誠実と云う意味になります。たとえば「神の愛」と云う時、「神」を愛する人間の愛だけではなく、「神」が持つておられる、人間一人ひとりに対する愛と云う意味もあるように。

「ピステイス」を信仰と云う意味だけに解釈しますと、神に対する人間の態度だけに限定されてしまいますが、「ピステイス」は本来もっと広い意味の語で、神が人に示される、「ピステイス」と云う用法もあるのです。たとえば、ローマ書 3 章 3 節では「ピステイス」は**神の誠実**を示し、I コリント 1 ; 9 では「神は**真実な方**《ピステイス》です」と云われています(ともに新共同訳)。バルトもローマ人への手紙 3 章 2 2 節「キリストのピステイス」を「キリストにおいて顕された神の**真実**」と理解すべきであると云い出して、周囲を驚かせました。確かに**キリストは神の真実の顕現**なのです(ローマ 1 5 ; 8)。

私が(市川喜一師ご自身)信仰に入った若い頃、信仰をキリストに対する自分の態度と理解して、信仰を維持し深める為に努力し苦しみました。しかし自分の愚かさや弱さに直面して、聖書(特に旧約)を通して神と自分の関係は、私の信仰によって成り立っているのではなく、**神の誠実の上に成り立っていることに気づかされたのです**。今「真」と云う語を「自分の言葉と自分の現実の姿が違わないこと」と云う本来の意味にとりますと、神と私の関わりは「わたしの信仰」の上に成り立っているのではなく、『神の信』によって成り立っていることを知らされたのです。このことによって私はコペルニクスの転回をせざるを得ませんでした。私は自分の信に絶望して、岩のような神の永遠の信に自分の全存在を委ねることが出

来たのです。ですから、それによって自分が義とされ赦される信仰を、「キリストに対する信仰」と云うような、キリストを対象とする自分の態度に限定する理解には満足することはできなくなったのです。

では「キリストのピステイス」を「キリストの誠実」とか「キリストの真実」とか訳すことはできるでしょうか。これもこの句の意味を狭く限定することになり、問題があります。パウロはしばしば、「キリスト」をつけないで、ただ「ピステイス」と云う語を用いて、「ピステイス」によって義とされるとか、救われるとか、神の子とされるとか云っています。その際の「ピステイス」は一般的な誠実とか真理ではなく、キリストを告白し、キリストと結ばれて生きる人間の、在り方全体を指している訳ですから、同じ語で表現しようとするればやはり、その様な内容を込めることの出来る「信仰」とすべきでしょう。

パウロが《ピステイス》と云う語で、このようにキリストを告白し、キリストと結ばれて生きる人間の在り方全体を指していることは、たとえば、ガラテヤ3章23～25での「ピステイス」の用法からも明らかです。

「ピステイスが現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、このピステイスが啓示されるようになるまで閉じ込められていました。こうして律法は、わたしたちをキリストの下に導く養育係となったのです。私たちがピステイスによって義とされるためです。しかし、ピステイスが現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません。あなたがたは皆、ピステイスにより、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。」
(ここに記されている「ピステイス」は、新共同訳ではすべて 信仰と訳されています)。

ここで《ピステイス》は、一般的な誠実とか信実ではなく、最終的に啓示された神の言葉であり、神の恩恵であるキリストに合わせられて生きる人間の在り方全体が意味されていることは明らかです。特に最後の文「あなたがたは皆、神の子なのです」がそれを明確に表現しています。そこでは、「ピステイスにより」と「キリストに結ばれて」或いは「キリストにあって」(エン・クリストウ)が同じ事態を表現する同格の句として用いられています。このようにパウロが、「信仰によって」受ける義とか、いのちとか、救いと云う現実を(キリストにあって)《エン・クリストウ》と云う表現で語る例はほかにも沢山あります。「ピステイス・クリストウ」(信仰)は「エン・クリストウ」と同じ現実を指しているのです。

(その2に続く)

「信仰：希望・愛」の展開の

第八部 「信仰と愛」に結びついた希望(その2)

「キリストに合わせられて」生きる

このようにパウロが「信仰」と云う時、それは既に「キリストにある人間の在り方全体」を指しているのですから、それは福音が告知する「主であり、復活者であるイエス、すなわち主イエス・キリスト」を告白し、その方に自分を投げ入れ、その方だけを拠り所とし、その方に合わせられて生きる人間の在り方全体です。

所で、この(キリストに合わせられて生きる)と云う現実、人間の態度とか姿勢だけでは現されません。キリストをわが主と告白する者だけに与えられると約束されている「聖霊」を受けることによって、態度や姿勢が初めて現実に、その人を本物にするのです。つまり、福音を自分の全存在をもって聞くことが、「信仰」と呼ばれているのですが、その信仰は人間の側の態度だけに終わるものではありません。十字架につけられて死んだ復活者キリスト・その事実を信じる者が聖霊を受けて、復活者キリストの現実を体験するようになることが、私たちの信仰の根幹となるのです。福音の世界においては、信仰とはキリストを内容とする体験、キリスト体験以下のことではありません。この体験を深められますと、「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きておるのはもはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ2；19)と云うパウロの述懐になります。私たちの信仰はキリストが顕された神の信(誠実・真実)と恩恵に基づいて、イエス・キリストを主と告白することによって賜る聖霊により、十字架と復活のキリストとの交わりを生きる、体験を与えられるわけですから、パウロが、「ピステイス・クリストウ」(キリストの信仰)と云った時、このような内容豊かな意味を持っていたと理解できるようになります。人間はこのキリスト信仰によって、真実に生きるようになるのです。

でもこの信仰によるキリスト体験と云う言葉を聞いただけで私たちの大方が、尻込みしてしまうでしょう。パウロのダマスコ途上での出来事などを思い出し、キリスト体験など、普通の人間は経験出来ないと感じるからです。だが私の経験から言いますと、キリスト体験とは、既に私の内におられるイエス・キリスト様の霊との交わりから生じてくる、生活上の動きの指示、殊に対人関係での指示、また知恵と云いますか、御言葉の解釈、もろもろの事象の理解と云った、ごく日常生活に即した、三位一体の神様への対応、であるように思えます。そしてそれは聖霊の実に沿った言動となる、筈です。つまり、**聖霊の実「愛・喜び・平和・寛容・親切・善意・誠実・柔和・節制」**(ガラテヤ5；22)が形に現れて、豊かな「信仰、希望、愛」に沿った人間性に溢れた私の対応、となって現れるでしょう。

しかし、残念ながら、私には生まれながらの醜い人間性がまだまだ完全には聖化されていません。駄目人間が随所に現れます。でもね、C・S・ルイスは「諦めずに一生懸命、イエスの真似をしているうちに、駄目な自分の言行の中に、イエス様が入って来て下さって、キラリと光らせて下さるようになるんだよ」。つまり、聖霊の働きがわたしの現実の中に見えてくるのだと云っています。故小池俊男主教様も「あなた方は洗礼によって、小キリストとされたのだよ。その事をわきまえなさい」とよく云われました。単純に、キリストの霊が働いて下さることを信じて、主の言われる善に向かって前進しましょう。

そして第一に、信仰は神の言葉の出来事ですから、神の言葉だけを人生の頼みとし、第二に、キリストの十字架に顕された神の恩恵を感謝し、「主の祈り」のすべてに心を注いで祈りながら、殊に「赦し」の重大さに心を致しましょう。第三に、信仰はキリスト体験から起こるのですから、聖霊の励ましを望み、復活を信じて、祈り続けましょう。

では現実の生活の中で遭遇する、苦難や悩みに対する望み(むしろ願望と云うべきでしょうか)を神様は知って答えて下さるのでしょうか。主イエスは「神は生きている者の神である」と云われましたし、イザヤ30:19「**主はあなたの呼ぶ声に答えて、必ず恵みを与えられる…**」と云う記載もあります。個人的な願いも聞いてくださると思います。勿論主の答えは忍耐して待たねばならぬでしょう。その答えの中で、私たちの望みも自分勝手なものではなく、正しく訂正されることもあるでしょう。人間同士のつきあいの中でも忍耐ほど大切な徳はありません。私たちは忍耐を続けてやっと「**キリストの平和**」を世界の中で達成できるのです。それが私たちの大きな希望です。

私も日本人ですから、年を取ってこの頃しきりに執着煩惱と云った言葉を思い出しています。仏教では、厳正な修行を経て選ばれた、僅かの僧侶が得度して「悟り」の境地に入ると聞いていますが、キリストを信じる者は皆ただイエス・キリストの十字架と復活を信じると云う単純な信仰だけによって聖霊を賜り、神様の恩寵と力を頂き、三位一体の神の力によって、わが身が愛と平安と自由に満たされると云う、希望を頂く。その希望によって私たちの人生は、喜びにあふれることを証しして行くのです。このことが、キリストの「信仰・希望・愛」と云う光からの指示であるように思えます。

芦屋聖マルコ教会の今年の年句は「**主の光の中を歩もう**」(イザヤ5:2)です。一体「主の光」はどのようなもの？ 暗くないのです。人間界は暗くても、主はその光によって云われる「わたしは暗くならない。如何なる絶望も私にはない」。主は希望の源泉。光。

私たちの、神・キリスト・イエス、聖霊。三位一体の主。だから当然温かくされるのです。人間同士の交わりが多少険悪でも、「わたしが中に入れば、すぐ温かくなるよ」と云われるのです。それは聖霊の実を自分に帯するようになることです。もう一度「**愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制**」(ガラテヤ5:22)が生きている自分の姿を創り、

キリストの豊かな「信仰・希望・愛」に沿った、「神の愛に生きている」人間性に溢れた自分の生き様となって来る事を祈りましょう。上より勇気を戴いて！

最後にもう一度 市川喜一師にお礼を申し上げます。有難うございました。

バルナバ 栄一

そして、もう一つ最後に、この《「信仰・希望・愛」の展開の物語》は一つの欠点を持っていることを謝らねばなりません。私はこの一連の物語が間違いをしたと云うつもりはありません。いやそれどころか、イエス・キリストの福音について自分の力を尽くして書き上げたと思っています。しかし、一部聖書的に漏らした視点があったのではないかと恐れています。

それはマタイとルカの福音書が、「マルコ福音書」と「語録福音書Q」とを編纂したもので、マルコ「福音書」では、イエスの受難とキリストの復活を含めて、イエスの出来事全体が、福音と記載されているのに、「語録福音書Q」では、伝承によるイエスのお言葉と教えのみ(たとえばマタイの山上の説教、又ルカの平地の説教、また大切な「主の祈り」など)を含んでなっており、且つ、マルコ福音書では、自分が福音を伝えていると明らかにその福音書の中で宣べていますが、「語録福音書 Q」では、福音と云う言葉がどこにも用いられず、タイトルとして用いられている「語録福音書」が、そのタイトルに相応しくないのではないかと云う論さえあるようです。私は福音とはイエス・キリストの生涯の出来事であると信じていますので、あえて、「語録福音書 Q」を、自分の書いたこの物語の中で詳述しませんでした。しかし、イエスの伝承が語る、例えば、「主の祈り」や「山上の説教」などが、「信仰・希望・愛」の展開の中に、当然含まれるべきものであることを否む者ではなく、私の論述の中の諸所で述べて来たと考えています。ひと言弁解まで。

なお「語録福音書Q」は、「語録資料Q」と記載されることもあります。

これで

「信仰・希望・愛」の展開の物語を終わります。主の平和！